

Bimonthly for Guitar

Armonia

Vol. IV No. 6

Special Issue: Russia -- U. S. S. R.

Nov.-Dec. 1957

第四卷第六号 (通刊24号)

ア ル モ ニ ア

昭和三十三年十一月・十二月



Editor : Dr. Isao Takahashi (Sakamoto, Miyagiken, Japan)

Associate editors: Seiichi Konishi, Jiro Nakano

今年は Mario Castelnuovo-Tedesco と Joaquin Rodrigo の協奏曲をはじめ、本邦初演と銘打った曲の発表が目についた。ギタリスト達が常に新作に目を見はって、いゝものを手がけようとする意慾はまことに好ましい。中でも10月24日第25回第一生命ホール音楽鑑賞会が Ars nova と題して Pierre-Boulez の「主なき鉄槌 Le marteau sans maitre」を初演（全曲ではなかったけれども）したことは特筆に値すると思う。6Saiten 誌22号でこの作品のウィーン初演のことを読んだ時から注目していたのだが、主宰者の杉田村雄氏からそのパルティータを見せていただいて、フルート、ピオラ、ザイロフォン、ビブラフォン、ギター、打楽器、歌（アルト）という珍らしい編成で、十二音階と数列の理論を極度に押し進め、モザイクを思わせ、カレイドスコープを思わせるこのモダンな音楽に、正直私は驚く外はなかった。ウィーンでは Anton Stingl がギターも担当し作曲家自身の指揮で演奏されたのだった。こうした新しい音楽がわが国で採上げられるようになったのは、たしかによこばいことである。今では Tedesco や Turina や Torroba や M. Ponce や更に H. Villa-Lobos でさえ私達には遠い国の作曲家達であるような気がしない。たゞそれらの作品を鵜呑みにしたり、うわつつらをさわるだけでなく、その音楽の精髓を理解し、それをあます所なく再現するまでになっているかどうか、それが気になる。

凡ゆる道はローマに通じるといわれる。ギターの道も一つと限らない。一步一步強く踏みしめて前進したいものである。Aguado, Sor, Giuliani, Tarrega の道を辿ってはじめてローマへの道が開けましょう。人工衛星のミサイルのスプートニクのという時代に Slow and Steady などいいたら一笑に附されそうだが、私は堅実を旨とした。

目 次

(第4巻第6号 通刊24号)

ロシア——ソ連のギター界……………	高 橋 功…………(1)
旧ロシアのギアー曲……………	中 野 二 郎…………(8)
Lp に録音しているギタリスト達……………	藤 田 不 二…………(10)
— 斯界時評 —	
写 真 版 { サハエッキーと その著 ロシアギター史の表紙……………	(13)
レベデフとソコロフスキー……………	(14)
ボボフとグラムスコイ……………	(15)
ボブリとペロット……………	(16)
父(武井守成)の思出……………	足 立 直 子…………(17)
武井氏のマンドリンオーケストラ曲について……………	甲 藤 三 千 雄…………(18)
高嶺君演奏のロドリゴの協奏曲……………	松 本 太 郎…………(21)
今秋のリサイタルをきいて……………	安 達 右 一…………(23)
海外ニュース……………	(26)
国内ニュース……………	(27)

添附楽譜 ペロット作 古いロシアの唄

編 集 顧 問 : 中 野 二 郎 ・ 小 西 誠 一

ロシア——ソ連のギター界

Guitar in Russia

高 橋 功

Isao Takahashi

ヨーロッパの西南端の国スペインの楽器ギターは地形からいって、陸つゞきにポーランドからロシアに輸入されたことは明らかである。ギターの黄金時代にイタリアのマウロ・ジュリアーニ M. Giuliani (1780—1840年) それについてスペインのフェルディナンド・ソル Ferdinando Sor (1780—1839年) がロシアを訪ねて、すぐれた演奏を行ったことがロシアのギター界を隆盛に導くのに役立ったわけである。

たゞジュリアーニにせよソルにせよ六絃のギターで演奏したはずなのに、ロシアでは早くから七絃ギターが採用され、それが普及していたことが奇異である。それに六絃ギターに一本乃至数本の番外絃(低音絃)を加えたのではなくて、はじめから七絃制なのである。その調律は大体 D—G—H—d—g—h—d¹ であったが、D—G—C—D—g—h—d だの D—Fis—H—D—fis—h—d だのも行われたらしい。そしてそれは主に民間に入り込み、ジブシーなどの好む音楽として次第に広まったのである。それが六絃ギターに優位をゆづることになったのは漸く前世紀のことであった。従ってロシアのギターを語る場合には先づ七絃ギターとそのギタリストから筆を起さなくてはならない。

× × ×

A. O. Sichra アンドレアス・オンボウイツ・シフラ。そのギターに対する献身的な誠実さと謙譲と、何よりもそのすぐれた演奏によってロシアのタルレガと呼ばれるシフラは、1772年ビルナに生れた。ポーランドの血を承けた父はロシアの貴族間に音楽教師として名高く、その子アンドレアスは初めハープを習い、後ギターに転じたが、ハープの技術が大いに役立ってギターの効果を高めたのであった。モスクワで名を成し1820年以降ペテルスブルグに移り住み1850年12月3日に永眠した。1800年にモスクワで、1926—29年ペテルスブルグでギターの楽譜雑誌を発行し、自作のギター曲を発表したが、その全作品は75 (又は200)と言われ、七絃ギターの教本やロシア民謡による幻想曲に見るべきものがある。その後の七絃ギターの大家にはシフラの門下が多い。例へばアクセノフ、アルチエロフ、ペロヘイン、ラヂジェンスキー、マルコフ、ペトロフ、セレンコ、スタコビッチ、フィンツォフ、チンメルマン、ワラモフなどがそれである。

S. N. Aksenow シモン・ニコライビッチ・アクセノフ。師シフラが作曲を献呈し、その献呈の詞に最上の称讃を書き添えているのをみれば、アクセノフのギター演奏がどれほどすばらしいものだったかが想像される。ハーモニックス音を考案し、グリッサンドやビブラートに工夫をこらした演奏は耳目をそばたしめるに十分であった。1773年 (又は1784年とも言われる) に生れ1853年に亡くなった。作品は11曲知られているが、殆ど全部がロシア民謡による幻想曲である。

M. T. Wyssotzki ミハエル・チモフエビッチ・ウィソツキー。詩人シエラスコフの荘園の農奴の子として1791年に生れたウィソツキーは、はじめアクセノフからギターを学び、1813年に農奴を解放されてモスクワに出、一時ジャーナリストとして詩人レールモントフ等の仲間に投じたが、すぐれたギター演奏によって有名になった。その力強い演奏、しかも澄

みぎった美しい音、そして流れゆくメロディ、豊かなハーモニーは、師シブラの激賞するところであった。それにジブシー達と交って、その音楽のよさを取入れる一方、ジブシー達に高い音楽性を教え込んでやった。彼の作品は84曲知られているがジブシーの民謡を主題にした変奏曲にすぐれたものがある。1837年12月16日モスクワで亡くなった。

W. S. Sarenko ワシリイ・ステファノビッチ・サレンコ。1814年官吏の子として生れたサレンコはモスクワで医学を修め、1833年博士号を得、同年陸軍タ医となってオラニエンバウムに着任、後ペテルスブルグに長く住んだ。シブラの高弟の一人で、一日に少なくとも3—4時間ギターを手にしないでいられなかったという。有名な画家スコロフスキーが妻が病氣になったので往診を頼みにかけつけたが、まあ俺の演奏をきけ、こゝはすばらしいだろう、というわけで、とうとう30分もたってやっとギターを置いて、腰を上げたという逸話の主である。ムソルグスキーと親交があった。1881年6月17日オルヤルで死んだが、後モスクワに改葬された。作品17曲の中では民謡風な幻想曲が目立ってすぐれている。

W. I. Markow (又は Morkoff) ウラミヂール・イワノビッチ・マルコフ。生年月日を明らかにしないが、シブラの弟子で1862年にシブラの教本を改訂増補して出版し、これを師に捧げている。マルコフは二重奏、三重奏、四重奏、ピアノとギターなど室内楽に力を至し、作品もそれにふさわしいものが多かった。その数90曲といわれているが、未完のものも多く中にはオペラ曲などもある。1863年ペテルスブルグで亡くなった。

N. I. Alexandrow ニコライ・イワソビッチ・アレキサンドロフ。トロエルの部隊附の将校だったが、退役後ペテルスブルグに住み、シブラに師事してギターに専念し、遂に大家の名をかちえた。1886年に亡くなったが、この作品は十一の曲集に収められ、八つのロシア風ロマンス、四つのエチュード集、バラードなどすぐれた作品を残している。

F. M. Zimmermann フェドール・ミハイロビッチ・チンメルマン。おそらくシブラの弟子の中で一番すぐれたギタリストで、ソコレフスキーやドビュクの書いたチンメルマンの演奏批評によると、ロシア最大のギタリストで、彼の前では外のどんなギタリストも弾くことをはばかったというほどであり、ギターのバガニーニの異名さえあったというから、そのすばらしさは想像にかたくない。生年月日を詳らかにしないが、シベリヤのトンボウスクの大地主で、壮大な体軀で豪放な性格だったらしい。晩年は妻に逃げられ、意気銷沈してギターを手にすることもなくなったという。1880年頃死んだと伝えられるが、その生前の作品50曲は、往年の名手を思出すにはいささか見劣りがすると言われている。

I. A. Pleskow イワン・アレキサンドロビッチ・プレスコフ。1827年ペテルスブルグに生れ、官吏となり、1840年頃からシブラについてギターを学び、間もなくギタリストとして認められるに至ったが、ヨセフ・シューマンと協力でバイオリンとギターの曲を作曲し、又チバルスキーと共にピアノとギターの曲を作曲している。ギターを外の楽器と組ませた点異色の存在である。1905年5月15日に亡くなった。

W. I. Swintzow ワシリイ・イワノビッチ・ツウィンツォフ。師シブラが作品を二曲もこ

の愛弟子に捧げている。生死の年月日は不詳であるが、その演奏は甚だすばらしかったらしい。

このようにシブラとその一門によって七絃ギターが広く長く隆盛をみて来た。しかしその作品から見ると、それはより多く民謡に取材したものであり、それは民衆と共にある音楽だったと言えよう。シブラとその一門は井の中の蛙の譏をうけても致し方がない。彼らは殆ど国外に出ることがなかったし、国外のギター界の趨勢に耳をそばたて、目を見はることをしなかったのである。それと同時に一度民衆の中に根を下ろすと、それはなかなか抜け出しがたいものであることは、所謂流行歌と結びついたわが国の特殊なギターの在り方をみれば、明らかなことである。ジュリアーニやソルやツァーニ・デ・フエルランティがロシアに来てすばらしい六絃ギターをきかせ、しばらく滞在さえしていたのに、それが従来七絃ギターにとって代ることが俄かには出来なかったのである。それほど根を張った七絃ギターの世界にそれでも徐々に六絃ギターが喰いこんで来たのは漸く十九世紀に入ってからのことである。

× × ×

M. D. Sokolowski マルクス・ダニロビッチ・ソコロフスキー。1818年ポーランドのシトミールに生れたソコロフスキーは早くから音楽の才を示し、初めバイオリンとチェロを習ったが、後或ポーランドの音楽家の弾いたギターを聞いてからギターに魅せられ、それからギターを生涯の楽器としてえらんだ。ビルナやキエフで演奏して成功をおさめ1847年にベテルスブルグとモスクワでリサイタルを開いて喝采を博した。ピアニスト、ニコラス・ルビンスタインと行ったジョイントリサイタルに際してモスクワの日刊誌は「ソコロフスキーのリサイタルは最も注目すべきものの一つだった。今やギターをつまらない楽器だなどと言わせない。どんな楽器だってすぐれた音楽家の手にとられるまでは、つまらないものなのである。ソコロフスキーの手になるギターは全くすばらしく、デリケートな音楽の一つ一つは真珠のようだし、その輝きはダイヤモンドの如く、その響きは銀の鈴かともがうばかりである。聞きしにまさる出来ばえで、何度もアンコールをくりかえすまで拍手がやまなかった」と称讃した。その後1864年から4年間ニコラス・ルビンスタインと共にヨーロッパの演奏旅行に出かけロンドン、パリ、ウィーンなどで好評を博した。ロンドンでは有名なギタリスト、ジュリオ・レゴンディ *Guilio Regondi* と親交を結び、その演奏をきいたレゴンディは「私はもう引退の時と考えていたが、ソコロフスキーこそ私の後継者である」と語ったという。レゴンディの方がソコロフスキーより4才も若いわけだが、すでに10才頃からステージに立ち神童と謳われたほどで、その演奏活動は、ソコロフスキーが30才頃から有名になったのに比べると、はるかに長がったわけで、やはりレゴンディは先輩を以て任じていたわけなのであろう。ソコロフスキーは七絃ギターの名手ウィソツキヤやスタコビッチやチンメルマンなどとも親しかったが、貴族のサロンに招かれ、ユーゼニア女王やマチルデ皇女のサロンにも出入りし、リムスキー・コルサコフとも親交があった。彼は熱血漢であり愛国者であって、1860年のポーランド革命には心を痛め、その心境が「スラブ幻想曲」に切々と盛られている。彼はモスクワの音楽学校にギターを正科として加えるよう進言したが、若い頃演奏を共にしたニコラス・ルビンスタインが校長だったのに、それを拒絶したことを甚だ快しとしなかった。晩年はひどいロイマチスムのためギターを手にすることが出来なくなり、1877年の王立教会ホールの演奏会を最後に引退したのであった。そして1883年12月25日モスクワ

で生涯の幕を閉じたが、大理石の記念碑とブロンズ製の胸像がその墓に建っている。彼自身は殆ど作曲せず、教本なども出さず、専ら演奏家として活動したわけである。

N. P. Makarow ニコライ・ペトロビッチ・マカロフ。1810年にコストロムスコイ州のツクロマに生れたマカロフは、両親の慈愛にめぐまれず、早くから家をとび出し、ワルシャワの軍隊に入り、除隊後公吏となって成功した。生来音楽が大好きで、初めバイオリンを手にしたが、後ギターを知ってからは、ギターの虜となってしまった。そして軍隊で鍛え上げた健康と、意気で積み上げた財産をギターに捧げた。1840年「交響的幻奏曲」を作曲して七絃ギターの大家シフラに見てもらったら、まるでなっていないとの評をうけ、それから作曲法や和声学を学んで5年後に、改作して再びシフラを訪ねたところ、天晴れの名曲と折紙をつけられた、という逸話が伝えられている。なかなかのがんばりやだったわけである。

1849年にヨーロッパのギタリスト歴訪の旅に出、マインツでカムベルゲル Kamberger, ブラッセルでフェルランティ Zani de Ferranti など親交を結び、ロンドンではシュルツ Leonard Schulz, パリではカルカッシ Carcassi やコスト Napoleon Coste と相識った。ウィーンで楽器製作家スタウフェル Stauffer の工房でメルツ Johan Kaspar Mertz と知りとくに親しく交った。マカロフが私財を投じて1856年ブラッセルの音楽学校の教授を総動員して行ったギターコンクールは色々な点で注目される。このコンクールはマカロフがジュリアーニ Giuliani の作品に飽き足りなく思い、新人の出現を望んで企図したのだと云われている。その進歩的な気概は学ぶに値する。次にこのコンクールは作曲と、楽器製作の二つの部門で行われたことも意味がある。ギター製作部門ではウィーンのシュルツェル Scherzer が一位に、ペテルスブルグのアルクセン Archuzen が二位に入賞した。作曲部門では応募64曲の中から同年10月16日の最終審査の結果、メルツの「コンチェルティノ」が第一位に、そしてコストの「大セレナード」が第二位に決定した。勿論この決定にあたり、コストが第一位に内定していたのが、これより2日前にメルツが死んだので、その名誉のため又未亡人のためにコストが勝をゆづったという美談がつたえられている。これを機会にメルツのマヌスクリプトは殆ど全部マカロフの秘蔵するところとなった。マカロフは晩年をブラッセルで過ごし1890年12月5日に亡くなった。マカロフの作品としては次のものが知られている。

1. 思い出、2. ブラルーラ「演奏会用幻想曲」3. ペニスの謝肉祭変奏曲、4. 変奏曲、5. モデラートと終曲、6. カマリンスカヤ、7. 心、8. 及 9. マヅルカ、10. マヅルカ・コンチェルタンテ、11. 英雄、12. 及 13. ロシア民謡集などである。ヨーロッパの有名なギタリストとの会見記の外、七十年の追想、万華鏡、音楽愛好論、露仏独辞典などの著者としても知られている。

マカロフの六絃ギターに対する功績はそうのように大きかったが、彼はロシア国内に於ても国外に於いて有名であった。

Pettoletti ビオトル・ペトレッティ。マカロフが国外で活動して名を成したがペトレッティは生れがイタリアで、その年月日は不明だが、ペトロ（ロシア名ビオトル）は早くからスエーデンに移りすみ、更にフランス、ドイツを経てロシアに入り、ペテルスブルグに居を構え、ギターを教えたり、独奏者としてステージに立ったりした。弟ヨハヒムは歌劇場の専属バイオリニストとして有名であった。彼の作品はボンのジムロックやマインツのショットカ

ら出版されているが、ロシア民謡に取材した変奏曲や幻想曲が多く、作品28のピアノとギターの為の幻想曲は六作である。75才で亡くなった。

Djakow ユリー・イリイチ・ディアコフ。1840年モスクワに生れたディアコフは陸軍工科学校に学び将校に任官した。はじめコリン Korin について七絃ギターを学んだがペテルスブルグに移ってからペトレッティに師事し六絃ギターに転向した。ディアコフは専ら演奏家として活動したが、先輩のソコロフスキーやマカロフやペトレッティとはかり、ミクーリン Mikulin, ラドスキー Radosskji, マスロフ Masloff, クリンゲル Klinger らと共にペテルスブルグにギター協会を設立して、自らこれを指導したことが注目されている。とくに二重奏に力を入れ、ベートーベンのソナタなどを自ら編曲してレパートリーの拡大をはかったのは認めらるべきである。このディアコフとミクーリンの二重奏をきいて、有名な作曲家アレキサンダー・ボロディン Borodin が喝采を送ったといわれている。

Stockmann ユリウス・ミハイロビッチ・ストックマンと Klinger イワン・アンドレビッチ・クリンゲル。ストックマンは1839年ペテルスブルグに生れ、学生時代からギターを手にし、当時4,000ルーブルの大金でギター曲を集めて有名になった。1868年クルスクに移り住みクリンゲルと相識り、毎週かゝず二重奏を楽しみ、親交15年に及んだ。クリンゲルは生年月日は不明だが職業軍人で少将の地位にあつた。1875年にドイツで最初のギター協会がライプチヒで結成されたが、ストックマンはこれに参加し、ドイツとロシアのギターの交流に任じた。1883年にはアントン・ルビンスタイン A. Rubinstein の推薦によつてクルスク国立音楽学校のギター科の教授に任命された。晩年クリンゲルがクルスクを引あげることになったが、このとき片見にシェルツェル作のギターをストックマンに贈った。けれどもこのみごとな贈りものも離別の悲しみを慰めることが出来なかったという。15年にわたる親交のほどが偲ばれてゆかしい。ストックマンは1905年12月4日、クリンゲルは2年後の1907年3月27日に他界した。

Decker-Schenk ヨハン(イワン・フェオドロビッチ)デッカー・シェンク。楽器製作家スタウフェルの門弟フリードリッヒ・シェンクの子デッカーは1826年ウィーンに生れた。幼少にしてギターを父から習い、又歌が上手だった。後歌劇団に入り、その一行とロシアに興行に出かけ、1861年ついにペテルスブルグに住むことになった。「フレナ」「ハジ・ムラ」「兵士と少女」などのオペレッタの作曲者並に演出家として名を成したが、妻の死後は劇場から身を退き、ギターやマンドリンを教授して余生を送った。彼は七絃ギターのためにも作曲しているが、ロシア民謡風なものにすぐれたものがある。娘アンネッテもギタリストとして有名になったが弟子のレベデフは傑出している。

Lebedeff ワシリイ・ペトロビッチ・レベデフ。1867年サラトフに生れたレベデフは早くからギターを手にしたが、ペテルスブルグでデッカー・シェンクと知ってからギターを以て身を立てる決心をし、1890年兵役を終えてからいよいよ演奏家の生涯に入った。同年パリに出てリサイタルを行い、フイガロ紙などで好評を博し、帰国後は主としてペテルスブルグを中心に活躍し、1898年には陸軍々楽隊の隊長に就任した。その外大編成のバラライカオーケストラを指揮したり、美声の持主で、ギター歌手としても有名だった。作品は多くないがロシ

ア民謡に取材したギター伴奏歌曲には見るべきものがある。晩年は教育博物館の楽器係をつとめ、1907年2月8日に亡くなった。

Polupajenko ミハエル・ワシリビッチ・ボルハエンコ。1848年生れのボルハエンコは医者であったが、ハルコフでピリコフにギターを学び、1875年デッカー・シェンクと知って、から、いよいよギターを励み、共に演奏旅行に出るというほどの熱心さだった。作曲に「ロシア幻想曲」「カマインスカヤ」などみるべきものがある。

× × ×

七絃ギターの後を追って頭を持上げてきた六絃ギターは二十世紀に入っやてと追いついた感じだった。それまで方々にちらばっていたギター奏者乃至はギター愛好家達が結集し、それが同好会とか協会とか連盟とかいうグループとなり、機関誌がお互の連絡に役立ってきたのである。

モスクワではソロビエフ Alexander Petrowitsch Solowjow (1856—1911) の門下にルサーノフ W. A. Russanow (1866—1918) やサヤエッキイ Sergei Spiridonowitsch Sajaizki (1850—1910) が、軍人上りのルサーノフは「ウィソッキー伝」や「ロシアのギター史」を著わし、医を業とするサヤエッキイは1899年以降「ギターとギタリスト」と題する研究誌を出したり目ざましい活躍を示した。その熱心な研究ぶりがマシュケビッチ W. P. Maschkewitsch に受けつがれたのである。

六絃ギターの最初の大家の一人マカロフを出したペテルスブルグでは、デッカー・シェンクがクラブを組織し、レベデフがうけつぎ、更にスランスキー Dr. Wadim Wasiliwitsch Slanskii (—1922) とフィンネ Dr. Viktor Nikolajewitsch Finne (1875—1899) の二人の医師が之に参加協力し、後にデミトリエフ Fiodor Dimitrijeff (1886—1910) やベラノフスキー Alexander Sergijewitsch Belanowskij (1884—) らが加って層一層ペテルスブルグのギター界は隆盛を極めた。それにイサコフ Pjotr Iwanowitsch Isakow (1886—) などのすぐれたギタリストがつぎ続いた。

グルスクではストックマンとクリンゲルを中心にクラブ活動が盛んになり、二重奏、三重奏などのアンサンブルによる和が効を奏した。

こうして六絃ギターが漸く軌道にのり出した時、1917年共産革命が勃発した。多くの惨劇と破壊に遭遇したロシアのギター界は、古い名器を失い、多くの文献を烏有に帰してしまった。あまつさえ、一部の過激な為政者によって、ギターはブルジョアの楽器とし、好ましからざる音楽として一時斥けられる運命に出あった。こうして折角頭を持上げて来た六絃ギターは再び凋落の憂き目にあわなければならなかった。多くの白系ロシア人達は愛器ギターを抱いて国外に亡命するのだった。

× × ×

共産革命の難をペロット Dr. Boris Perott (1882—) はロンドンにのがれた。ペロットは15才のときデッカー・シェンクについてギターを学び、後にレベデフにも学んだのであった。医学を身につけたペロットはロンドンに落つき結核専門医として栄えたが、1929年にはギター愛好家協会を組織して自らその会長となり、後進の指導に任じ、国外のすぐれたギタリストの招聘に当るなど、目ざましい活躍をした。ペロットはロシアのストラデバリウスと呼ばれるパッサーブスキー Passerbsky 1877年作の番外絃四本附七絃ギターを愛用し、それを自慢にしている。それよりも自慢なのは、ペロットの門から天才ブリーム Julian Bream

を出したことである。

亡命組のもう一人の雄はニューヨークに在住するボブリー Vladimir Bobri (1907—) である。ウクライナのハリコフに生れ、はじめ七絃ギター奏者だったが、アメリカに帰化し Segovia を知ってから六絃ギターに転向したのであった。生来絵が上手で、インダストリアルデザイナーとしても、その方のエキスパートであるという。それは彼の創刊したギターレビュー誌 *Guitar Review* を一見すれば直ちに了解出来るはずである。あの豪華なみどな、読んで楽しく見て楽しい雑誌はまさにボブリーの画才の成果である。Lp ジャケットのデザインなどにもすぐれたものがあり、年々筆者に贈られるクリスマスカードのデザインなど全くすばらしい。現在ニューヨークのクラシックギター協会々長の任に在る。

楽器自体にブルジョア趣味だのプロレタリア派などあるわけがない。問題はその方法論である。且つ早くから民衆の間に広く深く根を下したギターが政治の変遷によって姿を変えるなどということは出来るわけがない。こうしてギターは、鉄のカーテンの彼方において再び楽界に一派をなしているのである。勿論私達は最近までソ連のギター界のことは、外の部門と同じように知るところが少なかった。僅かにシベリアのトムスクにいるボポフ A. Popoff との文通によってその一端を知るだけである。

モスクワの国立音楽学校ではギターが正科となってい、その教授がクラムスコイ Alexandra Ivanov-Kramskoy である。写真でみるクラムスコイは非常に精力的で、その演奏スタイルもレパートリーも全く六絃のクラシックギターである。筆者の手にアルバムになったクラムスコイの作品が数曲あるが、練習曲や前奏曲の類は手がたく、民謡による幻想曲や変奏曲や小品には演奏会用として役立つ佳作もある。メンデルスゾーン、チャイコフスキー、ショパンなどの編曲をみても、クラムスコイはすぐれた演奏家でもあることがうかがえる。

この外クレニコフ T. Khrennikov, イワノフ Ivanov, レヒメンスキー Rechmensky, チェリオムキン M. Cheriomukhin, グリエル R. Glier, アレキサンドロフ Alexandrov, ヨルダンスキー M. Jordansky, ゴルーベフ G. Golubev, オソーキン M. Osokin, ソスノフチェフ B. Sosnovtsev, ルザーノフ E. Rusanov などの作品を手にとってみると、ソ連のギター界もなかなか活潑であることがわかる。

トムスクのボポフは戦前派で、早くから六絃ギターに専念し、アルゼンチンのプラット D. Prat などとも交渉があり、プラットに捧げた曲 [Dolor] もあるし、「ボルガのほとり (Suzla Volga) などは好ましい小品である。最近筆者のためにロシア民謡による独奏曲と二重奏曲を贈られた好意を多とするものである。

× × ×

最後に今年7月28日から8月11日までモスクワで第六回世界青年学生平和友好祭が開催され、ギター部門がそれに含まれて注目された。これには多くの国の、夫々特色のある音楽が演奏されたわけで、バラライカあり、ハーモニカあり、マンドリンあり、シテルあり、バンジョーあり、ドラムありという多彩なもので、勿論琴も三味線もあったのである。わか鈴木巖君が自作をひっさげてはるばる参加し、入賞の光栄に浴したことは既報の通りである。

ギター部門の審査には上記イワノフ・クラムスコイの外ドイツからヘンツェ Bruno Henze, イギリスからマイラント Ivor Mairant, イタリアからカリセ Ugo Calise, オランダからガフエル Wim Gaffel などが参加し、ヘンツェが委員長に選ばれたのであった。その審査員を前にしてソ連はモスクワ、レニングラード、スリナモからそれに、チェコ、ユーゴ、東ドイツなどの外セイロン、朝鮮、そして日本などから、選ばれた32才未満のギタリスト達が技を競ったのであった。

こうしてソ連のギター界が俄かに私達の前に浮び上ってきた。

(12月月5日記)

旧ロシアのギター作品

Guitarmusic by russian composers

中 野 二 郎
Jiro Nakano (Nagoya)

現今世界各国に散在するギター曲出版所のカタログに旧露西亜作家の名と作品を見出す事は極めて稀である。従ってギタリストのレパートリーにも露西亜作家のものが加えられている事は無く、第一旧露西亜のギター界というものが今までに紹介される機会が極めて少なかった。然し歴史の事実には全く瞠目すべき動きがあったのである。之等に関して比較的详细に述べられてあるのは Buek の「ギターとその大家」の中の“露西亜ギター界に関する章”であるが、之はいづれ高橋氏によって紹介せられるものと思われるから私は今までに散見した露西亜作家の作品に就いて述べてゆきたい。

西歐諸国でギターが隆盛を極めた所謂ギターの黄金時代にソル、ジュリアーニを初め多くのギタリストが露都を訪れて成功し、何年かを滞在し或は此処に永く住みついた人があったことはよく知られている。而も之等の人は之に関連して作られたと見られる作品をいくつか持っている。

Giuliani M.	op. 60	6 Var. tema Russo
"	op. 64	6 Var. tema Russo
Sor F.	op. 63	Souvenir de Russe
Pettoletti P.	op. 15	Fantaisie sur un hymne national russe
"	op. 32	Fantaisie sur une Melodie russe
Carulli F.	op. 110	Deux Airs Russes varies
Carcassi M.	op. 10	Theme russe 7 Var.

斯様にしてギターはロシアで歓迎せられ、次第にその根を張りギタリストのみならず音楽を愛好する人達にもてはやされ、真の民衆楽器になっていった。其の為にロシア民謡に最も都合のよい調絃が工夫せられ、七絃のギターとなり独得な発展を遂げていった。此の先頭に立ったのが貴族 Q. Sychra (1778—1860) である。彼はこの七絃ギターの為に教則本を書き沢山の曲を作った。主なものはロシア民謡をテーマにした変奏曲序曲ロシア、ポーランド舞曲が多くを占めているがスタイルこそ他の欧州諸国の作家と異ってはいるが、充分奏者としてVirtuoso 的風格を具えている。1935年に発行されたモスクワ国立出版所音楽部の出版目録には Sychra の七絃ギターの為の作品は33曲あり、作品番号と覚しきものは67を数えている。唯七絃ギターである為に其儘我々のギターに移すことが出来ないので広く現今のギター界に浮かび上がることが出来ない状態である。

Wyssotzki (1790—1837) は Sychra の弟子でその天賦の才によって更に七絃ギターを世に広めた。上記出版所カタログには彼の作品は30曲あり、作品番号は81を数えている。作品の内容はロシア民謡による多くの変奏曲が主で、師 Sychra の手法を更に発展させたもので作品の上からは絢爛たる技巧家を想像させる。ロドドン の Clifford Essex 出版社では Belanovsky によって六絃ギターに編曲された彼の “Under The Pear-Tree” “The weaver's song” の2曲が出版されているので之に依っても彼の作風の一部が窺われる。ミラノのイル、プレットロでも彼の主題と変奏を出版したが之は現存しないようである。強いて他の作家に類似点を求めれば Regondi の作風を髣髴せしめる部分が多い。

この他に七絃ギターを高度に進歩させた人々は Zimmermann, Beloschein, Morkow, Petrow, Wetrow, Ssarenko, Alexandrow, Milijukow, Ljachof, Solowiew, Russanow

等があり、前記出版所から夫々数曲乃至20曲程を出している。Zimmermann, Russanow 等は Etude, Prelude が数多くあり、民謡を主題にした変奏曲と異り、極めて内省的な作品である。斯様に七絃ギターは演奏会上の演奏楽器として発展する一方、質樸な農夫、官吏、軍人の間に滲透し、何処の祭にも現れるロシアのジブシーはコーラスと共に必ずこのギターを伴い眞の民衆楽器ともなった。

七絃ギターが斯様に発展している間に又ロシアでは本来の六絃ギターの研究も行われ他の西欧諸国の大家に追従した多くのギタリストがあった。Sokolowski, Makarow, Klinger, Decker-Shenck, Lebedew 等が最も著名で、就中 Makarow (1810—1890) がギター音楽向上の目的で企劃したギター作品の(作曲と楽器)懸賞募集した事はギター史上に大きな意義を持った。Mertz, Coste が提出した数種の作品は此の時の所産である。

演奏の大家としては Sokolowski (1818—1883) が著名でピアノの Nicolai Rubinstein と共演した時もあったが晩年は不遇であったという。作品は殆んど残さず、他の大家の作品を恰も自作であるかの如く弾きこなしたと云われている。Sokolowski が死んだ時は欧州諸国でも既にギター音楽が最も衰頹した時でロシアも又彼の死と共に演奏会場から六絃ギターの音が止んで了った。Decker-Schenk (1826—1898) は奥国生れの楽器製作家の子であった。歌とギターをよくし劇場音楽等を沢山作って活動した全盛時代もあったが幾多の曲折を経てロシアに入り、ギターの為に活動した。教則本を書き、露都やアウグスブルグ等で自作を出版したがその内容はロシア民謡民舞曲等が主で芸術的な所産とは云い難く、又一人の力で頹勢を挽回すべくもなかった。むしろ彼の弟子 Lebedeff (1867—1907) の活躍の方が大きかったと云えよう。彼はジュリアーニの三つのコンチェルトやパガニーニの五重奏曲を演奏したという。作品として今日見られるものはツィンメルマンで出版している六絃ギターの為の50のロシア民謡集くらいで、彼は又七絃ギターもよくし前記モスクワ国立出版所では之の為の作品集が見られる。Klinger 大将(—1898) はギターの熱烈な愛好家で作品も二つ程アウグスブルグで出版しているが多くの当時のギタリストと交流した。Stockmann (1839—1905) は独乙生れのロシア官吏であり、Klinger 大将の蒐集譜を譲り受け、絶えず価値ある新古のギター曲を探し求めた。Coste の未公開の作品全部メルツの未出版の写譜等も持っていたという。演奏も非常に熟達したので、専門家として出発する考えを持つようになったが、事情が許さずついに一愛好家として終ったが、ミュンヘンに国際ギタリスト聯盟が創立された時はこの運動の最も熱心な要求者であったということである。

Buek の項は大戦中ロシアが経験した政治的事件と革命とは全露のギタリスト運動を終らしめ無数の文化価値の滅亡と共にロシアに於ける古いギター曲の蒐集や財宝は破滅に帰した。1923年の或る音楽新聞は「国家を危くするギター」としてギターはブルジョア階級の愛好楽器としてボルシェヴィストの表にのせられ公の売買を禁ぜられている。と結んであるが私がモスクワ国立出版から出している前記の資料を入手したのが1936年で、出版は1925年であるので Buek の記事とは矛盾している。

尚その頃同時にショットで出版しているセゴビアのレパトリーの大部分及びタルレガの作品の代表作が前記国立出版所で其儘ロシア名で再版せられているのを見ると相当活潑にギター音楽が行われていることに間違いないが、戦後の様子に就いては残念ながら私は殆んど知らない。

尚もう一つ落したのは Nemerowski がある。独乙のツィンメルマンで56曲興味ある作品を出版している。アメリカの Bickford 夫人は其の教則本に之から数多の曲を採用しているが最近又同所から古典大家(Bach, Beethoven……等々)の編曲集を3巻に分けて再版した。之によって見てもロシア作家の一種共通したスタイルというものが感じられる。残念ながら Nemerowski 其の人に就いて知ることないのが遺憾である。

Lp レコードに録音している

ギタリスト達 (完)

藤 田 不 二
Fuji Fujita (Tokio)

三回にわたって、アメリカ合衆国及びイギリスの Lp に録音しているギタリスト達を紹介したので、今月はフランスのレコードからみた演奏家達について記してみたいと思う。

Aubin, Christian.

クリスティアン・オーバンはフランスの演奏家とみられる。彼が同国のエコー・レコードへ次の作品を録音したのは、1953年の事で、同年暮にこのレコード会社の最初の Lp として発売されたものであった。

タランテラ (カステルヌオヴォ・テデスコ) マジャ、デ、ゴヤ (グラナドス) 前奏曲 (ヴィラ・ロボス) 円舞曲 (ボンセ) ファンダンギロと夜想曲 (トルロバ) グラナダ (アルベニス) 前奏曲とフーグ ニ調 (バッハ) 「奏鳴曲第一番」より ブーリーとドゥブル (同) サラバンドとドゥブル (同) 「ヴァイオリン用組曲第四番」より
(レコード番号 L. G. -I)

彼の録音についての批評は、フランスのレコード雑誌「ディスク」の第62号 (1954年1～2月合併号) で H. J. により行われていたが、演奏家についての記事はなかった。

オーバンの録音は、フランスのコントレポアンにも行われていた (M. C 20-111 10吋)。発売会社は前と異っているが、レサイタル第二と題され、左の作品を演奏したものであった。二つの組曲ロ短調とヘ短調 (カムピオン) 組曲ヘ短調 (ジョンソン二世) サラバンド (ゴージェ) 組曲ト短調 (ビットナー) 組曲ニ短調 (ワイッス)

ロバート・ジョンソン二世 (約1583—1633) は、イギリスのリュート奏者兼作曲家で、同名の父はスコットランドの作曲家であった。彼は1596年にトーマス・キットソン卿の孫娘の夫であったジョージ・カレー卿の弟子になり、七ヶ年間師事した。1604年から王室づきのリュート奏者をし、チャールズ第一世迄仕へた。彼のヴァージナル、リュート及びヴィオール用に作曲した草稿は、フィッツウィリアム、ケムブリッジ大学、オックスフォード音楽学校、クライスト教会、王立音楽大学などに保存されている。

フランスのレコード、カタログでは「組曲ヘ短調」の代りに「アルマンド」と記しているのは、レーベルがそうになっているためなのであろう。

Diaz, Alirio.

ディアズは高橋功氏の「師弟論」によると、セゴヴィアの弟子で、ヴェネズエラの演奏家である。(本誌第4巻3号参照)。

ディアズはフランスの「音楽宝庫」レコードへ録音を開始したギタリストである。彼の「リサイタル第一巻」には、左の作品が組合されている (L. D. -032 10吋)。

前奏曲とフーグ、ニ長調 (バッハ) パラグアイ舞曲 (バリオス) 円舞曲 (ボルジェス) ガリアルダ、歌調と変奏曲 (フレスコバルディ) ノルテナ (ゴメス・クレスポ) エル・テストメント (リヨベット) 練習曲第一番 (ヴィラ・ロボス) 「チョーロ第一番」より

上の作曲家の中アンヘル・バリオスは、1886年1月2日にグラナダで生れたスペインのギ

タリスト及び作曲家である。彼はギター用にいくつかの作品、バンドゥリア、ラウドとギター用の三重奏曲、などを創作した。彼は1919年3月8日にマドリッド王立劇場で上演されたゴエスク歌劇「エル、アヴァビエス」の作曲で、コンラッド・デル・カムボに協力し、自身で短い喜歌劇「私のグラナダ」を書いた。彼の様式はグラナダの郷土音楽を深く加味している。

Maroto, Sebastian.

マロトはフランスのパデーマルコーニに録音を始めている。彼のギター独奏と最初のリサイタルは、次の作品で編成されている(D. T.—1028 10時)。

ガヴォット(パッサ) サラバンド(ヘンデル) 三重奏曲(ハイドン) サラバンドとブーリー(デ・ヴィッセ) セレナード(シューベルト) メヌエット(ラモー) 練習曲(カルカッシ) メヌエット(ソル) ソレア(ファルガ)

Santias, Carlos.

サンティアスは現代スペインのギター界で著名になりつゝある新進演奏家である。彼はバルセロナ音楽院で、グラチアノ・タラゴについて学んだ。サンティアスが公開の演奏会で初演したのは、7才の時であった。

1954年に行われたサンティアスの録音は、フランスのフェスティヴァル・レコードが発売し次の作品を組合せている(F. L. D—32)

前奏曲第七番(ショパン) 奉献(グラナダス) マヅルカと前奏曲第五番(タルレガ) 亜麻色の髪の娘(ドビュッシー) 常動曲(ブーランク) 粉屋の踊り(ファリア) 「三角帽より」三つの舞曲(自作)

サンティアスの「三つの舞曲」は「橋の上で」「サバットー悲しみの舞曲」と「リズム、子守唄とブルドン」からなっている。

この録音についての評は、1955年4月のディスク(フランスのレコード雑誌)にのっていた。数年前にフェスティヴァル・レコードの日本プレスが行われ始めたが、その後発売中止となっていて、サンティアスのは、現在の所輸入されるのを待つ以外、入手の見込は立たない。

Wörschinger, Fritz.

ヴェルシンガーは1901年7月29日に生れたギタリストである。1919年から24年の間ドイツのミュンヘンでハンス・リッターについてギターを学び、21—25年は同市のゲオルグ・シュテパーにピアノと理論を師事、24年はチェントベルイシ、モッザーニからギターの指導を受け、29年にはミュンヘン音楽院でヴィオラを研究した。

彼は1925年から演奏旅行をし、ミュンヘンのギター室内三重奏団と共に演奏活動した。

ヴェルシングは右の三重奏団のために演奏曲目を編成し、28年にマインのシヨットから出版した。D. アグアドの練習曲とギター独奏曲の編曲もして、29年に同社が出版した。彼はチェコスロヴァキア、スイス、イタリアとデンマークへ演奏旅行し、録音はホモコード、オデオンレコードなどへ行った。現在はスイスに住んでいる。

ヴェルシングの出演した最初のレコードは、ドイツグラモフォンの「音楽史版」のために録音したボッケリーニの「ギター、二つのヴァイオリン、ヴィオラとチェロ用の五重奏曲ホ短調」(作品50の3)である(14070—APM)。

この作品はアレグロ・モデラート、アダージョ、ミヌエット及びアレグレットの四楽章で書かれていて、ルドルフ・フェリカニ、ヴォルフガング・ナイニガー(各ヴァイオリン) マリアンヌ・マイヤー(ヴィオラ)及びアウグスト・ヴェンツィンガーが出演した。

レコード

今年はコロムビアもビクターもデュクレテ・トムソシも

ブラメンコのLpを出して、それが相当の売行を示したということはブラメンコギターの将来に明るい希望を持たせてくれた。エンジェルがユパンキをSpで出したが、ユパンキの芸術は今ではアルゼンチンはおろか、世界の心ある人達が高く評価しているのであるから、LpかせてEpで、出しおしむことなく出してほしいものである。デッカは引きつぎセゴビアを出し、ゴメスを出してくれたが、ゴメスの管絃楽と組んだLpはちといたゞけない。

ウエストミンスター・ジュリアン・ブリームのLp発売が来月にのびたのは気がもめるが、20日頃には発売となるはずで、前以て喝采を送っておく。総じて1957年の最大収穫はエンジェルのブラメンコ入門か。

10月末の日曜のNHK朝のテレビにアンダルシアギター

四重奏団が出演。あれはあれで楽しめるが、クラシックともブラメンコとも、といってアルゼンチンスタイルともちがった、その混血呪的なものである。国藤さんが、その時も、それから数日後「歌の花びら」の時間にも独奏したが、それはロマンスとアルハンブラの思出で、クラシックものと認めよう。男性ギター独奏家のNHKテレビ出演はいつになったら実現出来ることか。

11月3日のNHK朝の音楽に比留間門下の竹内郁子さんのマンドリン四重奏が出た。一列模倣隊に並んだ配置は何とかならなかつたか、又マンドリンはイタリア系の音楽にいいのが沢山あるのにスペインものを弾いた意図はどこにあるのか。12月3日のNHK「しらべに寄せて」に又竹内さん出演。竹内さんは幸運な人である。演奏も上手であるが。

テレビ

映画

期待された「リラの門」は男の友情を描いた佳作だった

が、ジョルジュ・ブラッサンスのギターには失望した人が多かったかも知れない。楽器もよくないし、把持法もいけないけれども、ジャンソンの歌い弾きはあれでいいのであろう。あの映画の音楽としては成功したものである。「誇りと情熱」に於けるパコ・アヴィラのブラメンコはすばらしかった。あのときの戦争で、スペインの敗退の跡に何万というギターが捨てゝあったというエピソードがギター音楽史に伝えられているのである。「陽はまた昇る」は「ゴヤ」につぐゴメスが音楽を担当した映画である。ゴメスのギターもすばらしいが、ホセ・グレコの踊りがみものである。次に期待されるのはチャップリンの新作「ニューヨークの王様」。マンドリンセレナーデがテーマになっているからである。

世界時評

すこし旧聞に属するが10月17日NHKで産業音楽祭の録

音放送があった。その最後に平山英三郎氏指揮松屋マンドリンクラブの川崎貞利作「西域より」が放送されたが、合唱や吹奏楽や管絃楽に位して、はるかにそれらを凌ぐ好演であった。こえて11月8日文化放送から比留間絹子女史のマンドリン独奏が放送された。筆者のラジオが上等でないので聞きとりにくかったが、カラー・チェとムニエルの傑作を堂々と演奏した。さすがに第一人者の貫録十分であった。男性マンドリニストの奮起を待つ。

11月30日NHK全国放送で古賀政男氏指揮の明大マンドリンクラブがケテルビーの「ベルジャの市場にて」とチャイコフスキーの「白鳥の湖」演奏。オリジナル作品ではないが、好ましい選曲であり、好演であった。地方公演などではいかにもよめいた曲目を並べているが、立直った感があってうれしかった。

ラジオ

С. С. Зайицкий.

Интернациональный Союзъ ГИТАРИСТОВЪ.

Сообщения Интернационального Союза Гитаристовъ

изданныя секретарями Союза въ Мюнхенѣ

за 1900—1901 гг.

съ добавлениемъ биографій и портретовъ выдающихся дѣятелей гитары, членовъ
Интернационального Союза Гитаристовъ.

СОДЕРЖАНИЕ:

Предисловіе. Введение. Биографіи и портреты.
Уставъ И. С. Г. Полный переводъ журнала
И. С. Г. „Другъ гитары“ (Gitarre-Freund).

МОСКВА.

Типо-антографія А. В. Васильева и К^о, Петровка, д. Облиной.
1902.

サハエツキイ著ロシアギター 史の表紙

サハエツキイは1899年9月にドイツのミュンヘンで国際ギター協会が誕生した時、ロシア代表としてこれに参加し、私財を投じてその機関誌ギターの友 *Gitarrefreund* のロシア語版を発行するという熱心さであった。そしてまず国内のギターに関する資料を集め、同志ルサノフの協力を得て1902年に「ロシアギター史」を出版した。この著書は257頁に及び写真版26葉を加える立派な貴重な文献である。それが共産革命によってロシア国内でも散逸してしまい、国外に出た分も二度の世界戦争で亡失し、今では珍品中の珍品となっている。武井文庫に秘蔵されてあったのをここに表紙と写真版数葉だけでも公開出来たことはまことに本誌の光栄とする所である。



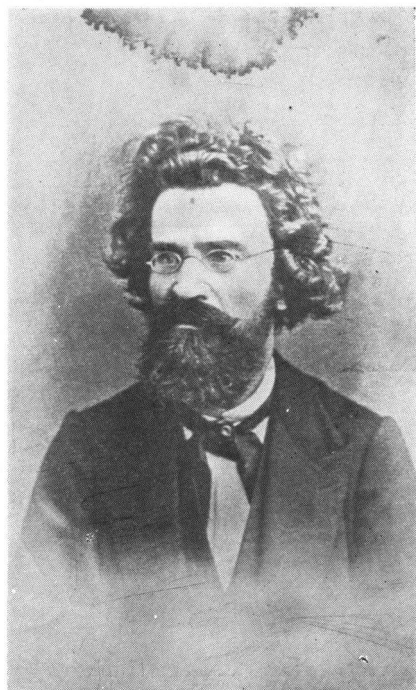
Sergei Spiridonowitch Sajatzkij

サハエツキイ (1850—1910) は婦人科医で、モスクワ大学の講師という肩書を持っていた。医者には道楽者が多くて、ギター界でもその例を少からず見受ける。サハエツキイもその中の一人である。しかしサハエツキイの場合は道楽どころでなく、自らギターを持ってしばしばステージにも立ったし、その子ボリス及びセルゲイもギターを仕込んでトリオを編成し、ギタリスト一家として有名だった。そしてサハエツキイ邸の私演会にはモスクワの上流社会の人達が集りソロビエフやルサノフなどのギタリストなどもよここんで参加して、当時のモスクワ音楽界のよびものになっていたという。



**Wassilij Petrowitsch
Lebedeff**

レベデフ（1867—1907）はロシアに早くから普及していた七絃ギターから、六絃ギターに移る所謂過渡期の重要な地位を占めている。師 Decher Schenk の教をうけて六絃ギターにより、1900年にパリの世界博覧会に出演して好評を博し、爾来ギターの演奏と教育に致した功績はロシアギター史に欠くことの出来ない存在となっている。1898年ペテルスブルグの教育博物館に職を奉じて、ギター教育に専念したし、七絃ギターと六絃ギターのために書下した教本は今でもロシアでは珍重されている。番外絃附十絃ギターのための50のロシア民謡集はギターの普及に大いに役立ったものと言われている。



**Markus Damilowitsch
Sokolowski**

ロシアの民衆、とくにジプシーの間に深く根を下した七絃ギターを、スペイン正調の六絃ギターに切り替えるのには並穴抵の努力ではなかったはずである。ソコロフスキーはそれに献身した闘志であったわけである。しかもソコロフスキーは国外に於いて名を成した最初のロシアのギタリストだったことも、記録されなければならない。写真でみるソコロフスキーは闘志満々という風貌である。しかも彼のギターの音は実に美しく澄んでいて、真珠のようとかダイヤモンドのようだと銀の鈴のようとかか批評されたのであった。かつて Giulio Regondi が、ソコロフスキーこそ自分の後継者だ、といったが、その一言だけでもソコロフスキのパーチュオーズ振りが想像される。



Ivanov-Slamskoy

スラムスコイは写真からみると私達とそうちがわない年代である。彼のオリジナル作品をみるとジュリアーニ風で、編曲ものもイタリア派に近い。従つてスペイン派を主流とするギターの趨勢からみると、そのスタイルは新しいものではない。しかしその作曲技法はなかなか手がたい。その技法はイタリア的だが、そのテーマなり、そこに描かれるムードはやはりロシア的である。そこが又好ましいのである。民族性に深く根を張った音楽には、何か強さが感じられる。国際性も普遍性もいゝけれども、郷土性も民族性も亦好ましい。今後スラムスコイとの連絡によって、ソ連のニュースを提供出来ることゝ思う。



Arseny Popoff

モスクワを去ること遙か遠くシベリアのトムスクにあって、戦前から六絃ギターを手にしているボボフ。共産主義も、デモクラシーも我関せずの態でひたすらギターに専念している孤影。何か淋しいが、そうした純真な姿こそ史上に名を遺せられても、実は尊い存在なのである。私と早くから文通してい、私の手元にある戦後のロシアのギター曲はオリジナルと編曲を合せて二、三十曲になるが、何れもボボフに送ってもらったものである。その外マンドリンアンサンブル（中にはバラライカを含む珍しいものもある）も十曲ほど送ってもらった。ボボフの好意がなかったなら、本誌のロシア特集など思いもよらなかったのである。



Dr. Boris A. Perott

ペロット博士は本年75才。15才からギターを手にしたというのだから、六十年もギターと共に生き抜いてきたわけである。Decer-Schenk や Lebedeff の頃のロシアギター界を知る唯一の人でもあるわけである。大学卒業直後シベリヤから日本に来たことがあったので、とくに日本には親しみを持って、沢口氏の霊前に「ショパンの夜想曲」を献じ、私のために「悲しき想い」を作曲してくれた。現在ロンドンに医院を開業している、カタワラフィルハーモニックギターソサエティを主宰し、指導的な穴御所的な存在となっている。白系のために早く祖国を去ったのであるが、むしろロンドンで所を得ている感がある。



Vladimir Bobri

私達には豪華な Guitar Review 誌の編集者として親しまれているが、ニューヨークでは所謂工芸図案家として名が通っているのである。ギターレビュー誌の隔々まで心のゆきとどいた編集をみれば、そのすばらしい才能の程がうかがわれる。ロンドンに於けるペロット博士のごとく、ボブリはニューヨークに於ける穴御所的存在である。やはりスラブ系のボブリは亡命してアメリカに移り住んでいるのである。ボブリは作曲家としても好ましいギター曲を出版しているが、ギター誌の編集者としてユニークな存在で、フラメンコ特集のためにスペイン、ブラジル特集のため南米へ旅行するという気構えは、まねの出来ない努力である。Segovia の信頼が厚いのも道理である。

父(武井守成)の思出

足 立 直 子

「父の耳」

父の耳は、鋭かったようである。

私が、ギターを爪びいていると、その音程が狂っているといつて、わざわざ二階へ上ってくる事がよくあった。亦、私がギターの音を合せていると、傍にいた父が、ふと、「その合わせ方、誰にきいた？」と鋭い目をし、私が「直子が考へた」というと目の色を和げて、「よし、そのやり方がいいんだ」と、満足げにいったこともあった。

鎌倉の家には、よくこじゅけいがきた。滑川に近いその家には、いつも松林を渡ってくるしづかな風の音があった。

夕方、ミシンをふみ、台所に立っている私の耳に、二階で弾く父のギターの音が、ぼうんぼうんと聞えて来るのであった。それは、毎日違った曲なのか、同じ曲なのであるかわからないような弾き方であった。しかし、音程はたしかなやうだった。

このごろ、忙しく働いている私の耳に、ふいに、ぼうん、と父のギターが聞える事がある。耳をすませれば、それは、テレビやラジオからのギターの音なのであって、父の弾き方とは、まるで違うのであるが、しかし、どこか音のくるっている場合も多

いのである。

父の耳は、大きな耳だったようである。

「父の目」

父の目はひとへまぶただった。細長い顔にさして大きくなく開いてゐた。私はいつもその目じりの下った、しわの多い目をみていた。幼い頃、ふちなしの眼鏡が鼻をつまんでいて、それを取ると更に優しげになった目であった。叔父達の何か面倒な事が起る度に、いらたゞしげな怒りを秘めた目であった。

晩年、ひたひやほゝのしわと共に、殆ど怒りを現さない目であった。が、その目でじっと見つめられると、私は遊び呆けるを断念するのだった。

父が、病院に運ばれる間際に、父は布団のわきに坐った私を、やゝ首を持たげるやうにして見た。それは身体の苦しさを訴へてはいなかった。たゞ私に対する無限のあはれみをたゞへてゐた。

父の床が、寝台車で運び去られる時、父は私を見なかった。たゞ苦しげな息づかひだけを家の中に残して去っていった。

父の目は、それ切り私の目の前に見ひらかれなくなったのであった。

ウエストミンスター1月新譜

ジュリアン・ブリームのギター独奏

(12吋Lp ¥1,900)

ソル 作 練習曲第5番
ロンドアレグレット
練習曲第9番
メヌエット
アンダンテラルゴ
練習曲第12番
ラルゴ

トリナ作 タレガ讃歌
(ガロチン、ソレアレス)
ファンダンギロ
アンダンテ (ソナチネより)
ラファガ
ファリア作 ドビュッシイの墓に捧ぐ

武井氏のマンドリンオーケストラ曲に就いて

甲 藤 三 千 雄

武井守成氏作る所のマンドリンオーケストラ曲は全部で50曲ある。原曲がギター独奏曲で、後にマンドリンオーケストラ曲に編んだものが10曲あり、あとは最初からオーケストラ曲として作曲された。武井氏のオーケストラ曲は殆んど全部曲名が付けられて居る。op.5.「ホ調のミヌエット」、op.32.「嬰へ短調インテルディオ」、op.42.「即興曲」くらいが無題である丈だ。曲名は春のものが、

- op. 14. 踊る小花
- op. 15. 晩 春
- op. 22. 春のノスタルジア
- op. 34. 春祭の夜
- op. 43. ゆれる一輪の花
- op. 46. 春去り行く
- od. 75. 春燈の下

秋のものが、

- op. 11. 軒訪づるゝ秋雨
- op. 25. 虫の踊
- op. 26. 初秋の唄
- op. 27. 落葉の精
- op. 35. 豊 年
- op. 38. 夕時雨
- op. 49. 雨とコスモス
- op. 70. 木の実は踊る
- op. 81. 暮 秋
- op.113. 秋三題

であって、夏の曲は例の op.31.「夏の組曲」など余り無く、冬のものは全くない様である。他は全部無季の曲名である。

大体は一つの曲想を唄って居り、次のもの丈が組曲になって居る。

- op. 30. アルバムの二葉
- op. 31. 夏の組曲

op.111. 果物の舞曲

op.113. 秋三題

オーケストラ曲の楽器編成は作曲当時のOSTの楽器編成によって居り、初期のものと戦後作曲のものとは管楽器が除かれて居る。OSTの全盛時代には、宮内省楽部の奏者を招いてフリュート、クラリネットを入れて居る。

フリュート、クラリネットの入った曲は

- op. 34. 春祭の夜
- op. 35. 豊 年
- op. 39. 流 れ
- op. 41. 夕 雲
- op. 42. 即興曲
- op. 50. 祭礼の町角
- op. 64. 空をゆく
- op. 69. 藻
- op. 70. 木の実は踊る
- op. 74. 檳榔子

フリュートのみ入った曲は

- op. 15. 晩 春
- op. 25. 虫の踊
- op. 30. アルバムの二葉中
ネニア・アンティカ
- op. 43. ゆれる一輪の花
- op. 54. いりあい
- op. 63. 茜

管楽器の入った曲は絶対に是を除いては演奏する事が出来ないが、作者自身によって管楽器を除いた編成に作り変えたものが1~2曲ある。マンドリン系統は第一マンドリン、第二マンドリン、マンドラ（殆んど全部マンドラ・テノーレである）、マンドセロ、マンドローネ、であり、ギター系統はギター、キタローネになって居る。マ

ンドローネ、キタローネを除いては演奏出来ない曲もある。

ピアノはしばしば、助奏楽器として使用され、又是を除いては骨抜きになってしまう曲もある。例えば op.14.「踊る小花」の第二主題の部分と、最後の第一主題が現われる部分、op.34.「春祭の夜」に於ける第二主題に入っている短かい二連音、op.42.、「即興曲」での後半に出て来るアルペジオ、op.49.「雨とコスモス」の最初の部分と最後の部分の雨だれの音、それに中間部ギターソロの部分のアルペジオ、op.50.「祭礼の町角」の後半部に出る矢張りアルペジオ、op.54.「いりあい」の最後の一小節、等何れもピアノパートを絶対必要とするものである。

打楽器も可成使用され、それもありきたりのタンバリン、トライアングル等で無く、色々特殊の楽器を使用される。op.20.「朝鮮の印象」のタムタム他、op.31.「夏の組曲」の「花火見る子ら」のティンパニー他、op.35.「豊年」の最初に出て来る竹製の楽器 (Angklung) 等、是等がなければ曲が成り立たない。

武井氏の曲は1~2の例外を除いては殆んど p 又は pp で始まる。過去の演奏会で作者自身の指揮の場合、曲の演奏前少しでも客席が静かでないと、例えばせきをするとか、ドアを開けて入る人があるとかすると、仲々タクトをあげないし、一度あげたタクトも前の席の人が一寸でもガサガサするとタクトを下してしまう。これは折角の曲の p なり pp なりの聞かせ所をぶちこわすからである。

武井氏の曲はメロディーの重点をマンドラに持って行く曲が多い。マンドラを非常に好んで居たし其の使用法も非常に上手であった。ギターにメロディーを持たす事はしばしば行われた。例えば op.14.「踊る小花」の最初のテーマは第一マンダリンと

ユニゾンで弾かせて居り、途中マンドラメロディーと交互にギターのメロディーを div. による単音を使って居る。op.35.、「豊年」では後半部ギター単音によるメロディーがはさまれる。op.49.「雨とコスモス」では最初にギター四部による雨の描写を美しく映し出して居り、中間部ギターパート全部に第一マンダリンのメロディーを受けて、同じメロディーをギターソロとして弾かせる。其他 op.50.「祭礼の町角」、op.72.「ミシン」op.78.「春燈の下」等に盛んにギターを動かして居るのは矢張作者がギタリストであるからか。

武井氏の曲にはテンポの早いものは少い。大体にしんみりしたものが多く、華やかな曲が少い様である。各楽器に無理なテクニックを強要しないので、技巧的には一見容易に思われるが作者の唄わんとする曲趣を出す事は仲々タケしい。曲譜に書いて居ないニュアンスは矢張作者自身が指揮して初めて完全に表現されるのである。昔ドイツのグラモフォン・レコードにドイツのマンダリンオーケストラが武井氏の作品 op.26.「初秋の唄」他数曲を入れたが、成程楽譜通りには演奏して居るのだが、何となく間が抜けて居ると云うか、気分が盛り込んで居らない。

武井氏は色々な調子の曲を作っている。試みに是を分類して見ると、

シャープ、フラットの付かない曲

- Op. 9. 今日の喜び (途中からシャープ3となる)
- op. 30. アルバムの二葉の内ミヌエット (途中フラット3となる)
- op. 42. 即興曲 (途中からシャープ4フラット1に転調)
- op. 62. 空をゆく (中間シャープ

2 となる)

シャープ 1 の曲

op. 15. 晩 春

op. 30. アルバムの二葉より ネニ
ア・アンティカ (中間シャ
ープ 3)

op. 63. 茜

op. 81. 暮 秋

シャープ 2 の曲

op. 18 死せる若人へ

(途中フラット、シャープ
1 に転調)

op. 22. 春のノスタルジア (中間シャ
ープ)

op. 34. 春祭の夜

op. 108. 微 風 (途中シャープ 4、
シャープ 1 に転調)

シャープ 3 の曲

op. 14. 踊る小花

op. 39. 流 れ

op. 70. 木の実ほ踊る

シャープ 4 の曲

op. 72. ミシン

op. 75. 春燈の下

フラット 1 の曲

op. 41. 夕 雲

op. 54. いりあい

op. 74. 檳榔子 (中間シャープ 2)

フラット 4 の曲

op. 26. 初秋の唄 (中間フラット)

op. 35. 豊 年

op. 69. 藻 (中間ナチュラル)

こうやって見るとフラットの曲が案外少い
のが分る。

武井氏の曲は所謂タケイズムと云う様な
メロディーが出て来る。其れは何と云う
か日本的な、したしみのあるもので、聞く
と直ぐに口ずさみ得る。

op. 50. 祭礼の町角

武井氏は盛んに三連音符を使用する。そ
して是が又一種のタケイズムを作る次第で
ある。例えば op. 8.「今日の喜び」では第
二主題が三連音の連続であり、第三主題以
降、殆んど三連音が盛んに飛び出す。op.
20.「朝鮮の印象」では最初のクワルティ
ーノソロは三連音に始まり、第一主題の終
りには、マンドラ、リュート、マンドセロ
にユニソンの三連音のまじるメロディー
を弾かせて居る。op. 26.「初秋の唄」では
三小節目から始まる第一マンドリンのメロ
ディーは三連音をまじえた日本調のもので
ある事は皆さん御承知の通り。其他 op. 22.
「春のノスタルジア」op. 42.「即興曲」、op.
63.「茜」op. 72.「ミシン」、op. 108.「微風」
等に重要な三連音が出て来る。武井氏は是
等の三連音は一音一音、同じ速さのものゝ
接続したものではないと云う事を始終やか
ましく云わた。簡単に云えば、最初の一音
が長いのである。

武井氏のマンドリンオーケストラ曲の楽
器使用法はスコアを見ると今更ながら其の
使用法が巧である事に驚かされる。各楽器
の性能を十分知り尽して居るからであり、
而もギターと云う簡単な道具を手元に置いて、
低音から高音まで、其の和音を耳から
試みて居たからではあるまいか。

余程前であるが op. 20.「朝鮮の印象」中
のマンドラと第二マンドリンとが交互にアル
ベジオで第一マンドリンのメロディーを
助奏する所があるが、是は例のマネンテの
「メリアの平原に立ちて」のギター、マン
ドラ、第二マンドリンと順次に音を出分
て、第一マンドリンの伴奏をして居る部分
からヒントを得たのではないかと武井氏に
伺った所、返事をしなかった。

おことわり：——

前号に紹介しましたアプロニスの練習曲集 (出版社 Berber を Ricordi と訂正し
ます) について多くの方から照会があり、入手希望が多いので研究用に青写真複製を
試みました。200 円となっております。下記に申込んで下さい。

東京都豊島区巢鴨 7 の 1832 安達右一。

高嶺巖君演奏のロドリゴの協奏曲

松 本 太 郎

高橋 功 兄

高嶺君のリサイタルの感想を書く様にとの御葉書拝見しました。段々忙しくなる一方でギター演奏会の招待を方々から頂きながら仲々時間がなく、大分暫く聴いて居ません。それに高嶺君の演奏も未だ一度も聴いて居なかったのですが頂いた招待状の曲目にロドリゴの協奏曲が出て居たので曲としても是非聴き度く、高嶺君の勉強の結果が如何にこの曲を生かすかと云う事にも関心をそゝられたので出かけたのでした。

尤もシーズン始め以来打続く演奏会行きと後から後からと依頼される原稿書きの仕事でようようになって居た時でしたので同じ夜あった日本フィルハーモニーの新聞えの批評はとても書けそうもないので、音楽界評を分担して居る田辺秀雄君にそちらの方を引受けて貰ったので、高嶺君の方へ行く事が出来たのです。とはいっても日本フィルの方も曲目に聴きのがしのならないものが始めに2曲ありましたのでそれを聴いてから高嶺君の方に駆けつけて、聴ける丈聴く事にしました。

それで8人宛の全管楽器のアンサンブル二つが舞台の両端に座をしめて、単独演奏をやったり、かけ合ったり、一緒になったりする16—17世紀の作曲家ガブリエリのカンツォーナとバルトークの名作、弦と打楽器とチェレスタの為の音楽丈を聴いて、巖本真理の奏くモーツアルトの協奏曲とベルリオーズの幻想曲とはいいい事にして日比谷公会堂から第一生命ホールに大いそぎで行ったら、丁度ロドリゴの始まる前でした。まあよかったと思いました。

ホールにはいると安達君が居られたので隣に座って聴いたのですが、これは少々まづかったのです。というのは僕は人と一緒に聴くと如何も注意力が集中しないという悪い癖があるのです。それで大概の演奏会に行くと友達と離れて一人で聴く事にして居るのです。所がこの夜ホールにはいると安達君に暫く振りに御目に会ったので挨拶をして、ついとなりに座ってしまった訳です。もう一つは急いでやって来て落着く暇がなかった事も災を為した事になります。そこえ頭がひどく疲れて居るという悪条件が加わって居ます。

どうも申訳見たいな事計り書いて大変恐縮ですが、とにかくそういう悪条件の下に聴いたのですから僕のうけ取り方が甚だ怪しいという事を承知して置いて頂かないと妙な事になるおそれがあるので、一言御了解を得て置き度いのです。

所でロドリゴの協奏曲は大変魅力のある面白い曲であるのを発見して聴きに来てよかったなと思いました。カステルヌオヴォーテデスコの曲が穏和な、おとなしい、デリケートな曲といった感じがあったに対し、この曲はスペインの国民性、郷土色がより濃厚に表われて居ると思います。第1楽章のフラメンコ風のリズム、第2楽章の哀愁味のある旋律、生き生きとした Rond 形式の第3楽章の各とその対照と調和の中に大変魅惑的なものがあるのを感じないでは居られませんでした。そしてそれは「スペイン」の心と風土を感じさせるものです。カステルヌオヴォーテデスコが精緻な作曲手法によって寧ろイタリア的なものを

控え目に表現して居るのに対してロドリゴはそれ程遠慮しないでスペインを生かして居る様です。曲が色彩的で、スペインの感情や感覚を相当はつきりと表わし居ると思います。僕はこの曲のレコードを未だ聴いて居ないので欧州の演奏家がどの様に演奏して居るかは知りませんが、高嶺君の演奏を聴いてそういった印象を受け、こういう魅力のある作品がギターのレパートリーに加わった事を嬉しく思いました。

さて高嶺君の演奏についての僕の感想ですが、この一曲を聴いた丈で総てを云々する事は間違いかも知れませんが、僕はこういう事を考えました。日本の演奏家は（ギター丈ではなく他の器楽でも声楽でも合奏でも）手や喉の方に重点を置き過ぎて頭と心とがその次になったり、お留守になったりして居る様です。六多数がその様に思われます。これは毎月10回乃至15回各種の演奏会を聴いて何時も僕の感じて居る事です。ギタリストにしても同様であると思います。手や喉というのは技巧の事で、頭は曲に対する理解で、心は曲や音楽を感じる心の働き、感受性です。

所が高嶺君の演奏を聴くとこの3つが平均を保って居る様に思われました。少なくとも僕のこれ迄聴いた他のギタリスト（それは多勢ではありませんが）に比べるとそういう点ではいゝものを持って居られると思います。人によってはテクニックが足りないというかも知れませんが、事実音量の不充分、従って伝達力、説得力に不足があるかも知れませんが、けれども曲に対する理解と

曲を感じて居るという点では同君以上のギタリストは誰が居るでしょうか。何れにしてもこの3つの要素を平均して持って居る高嶺君を発見した事は愉快な事でした。

とはいっても高嶺君にも日本の演奏家共通の弱い所があるのを見のがす事が出来ません。演奏の表現力、表情がもっともつとある可きでなかったらどうかという事です。演奏があっさりし過ぎて人を押える内容、音楽性乃至は力が足りない事です。日本人はあっさりした、淡白な人種だから演奏もあっさりしたがる傾向が支配的です。日本人の作品を演奏する場合ならそれでもいゝでしょう。然し西洋の作曲家、西洋音楽の狙って居るのはもっと表現力のある音楽（の演奏）です。

ギターの場合は演奏技巧が難しいから仲々そうは行かないという事になるのかも知れませんが、然し何時迄もそんな事を云って居ては切りがありません。その難関突破が肝心な事あるのは勿論です。然し、テクニックで外から曲に取組むのと平行して作曲家の心や作品が何を表現しようとして居るかをもっと研究する事、作品の中には入り込む事、そういう事によって曲を内から生かそうとする事、その点にもっと多く頭を働かし、精進する事が特に注意されていゝのではないのでしょうか。然し高嶺君はそういう点では可能性の認められる人の様に僕には思われます。

同君が段々その可能性を証明する様に精進し、成長せられる事を期待し、祈ります。

添附楽譜について：—

前号にアルモニア版楽譜から「秋の唄」を添附楽譜に起用しましたが、今回も同様ペロット博士編曲の「古いロシアの唄」を起用しました。従ってすでにアルモニア版としてお求めになった方には別にソ連の新しい曲を準備してありますから申出て下さい。ロシアには「ボルガの船唄」「赤いサラファン」「黒い瞳」など実にいゝ民謡があります。こゝにとり上げたペロット博士のも実にいゝものです。ワルツ調で演奏も簡単容易です。附録にグラムスコイ編グレチャニノフ作マヅルカを加えました。御愛奏いたゞけると信じます。

今秋のリサイタルをきいて

安 達 右 一

溝淵浩五郎古典ギター独奏会

岸首相の演説を評してソツがないと云はれるが、溝淵氏のリサイタルにこのソツがないと云う言葉がその儘当てはまる様な気がする。そして首相の演説はコクがないとも云われるがこれに当てはまる部分もあった様に思はれる。

四分の一世紀と云う長い大臣級の業歴を持っている溝淵氏の17年振りの東京リサイタルであったが全18曲の演奏に見られたソツのなさはその貫録を充分示したものと云えよう。コクがなかった点と云うのは久しぶりのステージの為か前半多少上気した様に見られ音量に乏しかったことである。第一部のビゼーと第四部のアラダを較べるとビゼーが全体に弱く感じられたのである。尤も演奏の細い点は逆にビゼーの方が行き届いて居りアラダはかなり荒い演奏であった。

過去に於て溝淵氏の演奏テムポについていろいろ問題を投げたことがあったが参考迄に当夜の演奏時間を上げて見よう。

曲 名	作曲者	溝 淵	セゴビ	溝淵/セ
サラバン デ	ビゼー	2.00'	1.40'	1.20
3つのパ バーナ	ミラン・ サンス	3.40'	3.10'	1.11
幻想曲	ミラン	3.20'	3.00'	1.11
アリアと 変奏	フレスコ バルデイ	7.40'	5.15'	1.46
2つのガ ボット	バッハ	5.10'	3.50'	1.34
サラバン デ	ヘンデル	7.10	3.55'	1.83
メヌエッ ト	ハイドン	7.40'	4.35	1.67

クロイツ エルソナ タより	ベートー ヴェン	6.10'	—	—
無言歌	メンデル スゾーン	3.00'	2.50	1.06
ロマンス	シューマ ン	3.40'	2.25	1.51
ワルツ	ブラーム ス	2.40'	1.30'	1.77
エチュー ド	ソ ル	3.10'	—	—
メヌエッ ト	ソ ル	3.10'	1.40'	1.90
アラダ	トルロバ	4.10'	2.50	1.47
プレリュ ード	ポンス	1.40'	—	—
ラメント	ペドレル	4.40'	—	—
セニョー (トレモロ)	タレガ	6.40'	—	—

溝淵/セが1.5と云うことはSegovia 1分に対し溝淵氏1分半と云うことである。正味時間より比率と云うことでテムポ感を測定してみた訳であるがそこに現われた係数は興味があると思われる。

演奏に入る前2小節程試奏されるのを見受けたがこれから聴かうとする曲の興が削がれること甚しい、避けたいことと思う。

アンコールはトロイメライ、アルハンブラの想出の二曲。(10.28銀座ガスホール) 因みに溝淵氏は筆者の師である。

高嶺巖古典ギター独奏会

高嶺氏のリサイタルは前回を聴き逃しているので三年振りである。バッハのシャコンヌとアランフェスの協奏曲(ピアノ伴奏)を中心とした企画であったがだんだん物に

憶しないギタリストになったことが善い面にも悪い面にも現われている様に思われた。

善い面はよく勉強することである。ギター曲の中では大曲の部類に属するものと取組んで兎も角暗譜してステーチで弾くことは物おちするギタリストには絶対出来ないことである。そうしてこれらが初演である為勉強に当って何等指針がなく暗中模索でやってるであろうことを考え、そこに払われた努力には頭が下るのである。

悪い面は聴衆が聴いていると云うことを忘れて了うことである。リズムの取り方、音色の配慮は自分としてはよく考えているのかも知れないが、考えすぎてとんでもない結果になっていることに気が付いてない点が間々見受けられるのである。アルバーダのリズムがどうしてあの様に間のびして始まるかと云う事や、強烈奔放な表現であるラスゲアートにどうして細かい強弱をつけるかと云う様な事が指摘出来る。

バッハのシャコンヌはよく弾き込んだ跡が見られ好演だったと思う。しかし演奏中だんだんチューニングが崩れて最後Dの弦で奏されるEの音などかなり下っていたのは考えさせられて了った次第である。つまり弾弦の力に不経済な力が働いているのではないかと思うのである。

期待されたアランフェスの協奏曲は川村深雪女史の歯切れよい伴奏により大変気持ちよいものであった。蓋をしめたグランドピアノの音は異様な感じを伴ったが、p.f.をよく考えて現わしていた第三楽章など好感が持たれた。たゞギターでは前述のラスゲアートの点や第二楽章のカデンツァで爪の音が邪魔になった点があって致命的なものとなっていた。演奏会当夜より数日を経てNHKより第二楽章が放送されたが邪魔になった爪の音は意識しなければ殆ど聴きとれなかったのは筆者自身むしろ意外であった。

バレリーナのどぎついアイシャドウが客席から見ると立派な化粧に見える様なテクニクを高嶺氏が身につけている様な気がして心配でならない。今回は協奏曲の為に犠牲になった音色として考えるとして、何とかソリストとしての音色に戻りたいものである。

アンコールはマラゲニア

(11.13第一生命ホール)

因みに高嶺氏は筆者と同門の後輩である。

小原聖子ギター独奏会

真面目な新卒業生である。数少い女流ギタリストに新たに新人を加え得たことは洵に同慶の至りである。父君小原安正氏の感慨もさぞやと思われる。

第一部にパノルモを使ったことが成功だったかどうかは疑わしい。本人が好んで弾いた楽器であったなら別だが、前古典にふさわしい音色であるからと云うことでえらばれたのであれば結果的には不幸だったと思う。パルベロとはかなり演奏姿勢も違うし、又パノルモの音は多少こもった音で現代の演奏会場には不向の音色である。これを弾きこなすにはかなりの努力の要る楽器であるからである。

第二部のブジョールの四曲の中ロマンツア及び舞曲は好演であった。ブレリアの様にアルペジオで終始する曲やアルハンブラの想出のトレモロなどに見られた演奏は基礎技巧の必要を示していた様に思う。最近他の楽器のコンクール入賞者などは彼女と同じ位の年齢であるがギターの名誉の爲にもこれらの人々のテクニクに負けない素養を持たねばならないことを痛感させられるのである。

第三部は全体として最も好演と思われたが特にヴィラロボスの二曲は彼女がよくブラジル音楽の真髓に触れていることを示し

たものと云ってよかろう。アニドの来朝と云う生の事実が何か精神的なものをもたらしたのか、血の通ったものを感じさせたのは彼女の今後のレパートリーを方向づけるものとしたい。

新人とは一つのタイプを備えてなくてはならないとは父君安正氏が昨冬中林氏のデビューの際に寄せた言葉であったが、そのタイプは何か約束されている感じがする。

アンコールはヴィダリータ。

(11.18山葉ホール)

奥田紘正ギター独奏会

当夜の演奏で非常に進歩した面と停滞している面との両方を見ることが出来る様に思う。進歩した面は前古典やテデスコのソナタに見られた曲の解釈及び演奏スタイルであり、停滞している面は第四部に現われた演奏上のマンネリズムである。

第一部、第二部共にかなりの好演であったが兎に角この道を追究して行けばよいと云う端緒を掴んだ上で既に大きな進歩であると思える。欲を云えば弦と弦との音色のバランスがもっととれていて欲しいと思われる。例えば劈頭ビゼーの小品でニ短調で繰返す8小節は非常によい音色であるが、へ長調でfになるとそれ迄とそぐはない音色となつて了う。fを弾弦する右手拇指のせいであろう。テデスコと云う作曲家は演奏家に理解のない人らしい。セゴビアもフィンガリングには余程手を焼くらしいが、ソナタ第一楽章或いは第三楽章など同じメロディーがあちこちの弦に飛んで音色の統一が洵に難しい。この点奥田氏には難手の曲となる訳であるが、かなりよく纏められていた努力を多としたい。

第三部のギターとヴァイオリンの爲のコンチェルティータ(パガニーニ)は音量のバランスで感心出来なかった。ステージでヴァイオリンが客席を右にして位置したの

に對し、ギターが更に後方で然も正面に譜面を立てて了ったのが原因だと評していた人がいたが尤なことである。第三楽章のロンドでのかけ合いがヴァイオリンの音色が終始表面に感じられてかけ合にならず、折角の曲趣を削いだのは惜しいことであった。舞台練習と云うのがあるが合唱やアンサンブルで本番のときの、バランスに如何に注意を払うものかと云う様なことにももっと認識を持って貰いたいと思う。

当夜は非常に調子よかった様に思われるが、それが最後迄持ち続けられなかったのは体力的なものが原因しているのか、第四部はその点で大いに反省されなければならない。グラナドスの五番やアルベニスのグラナダなど手慣れた曲を持って来たことが、更に掘り下げた研究の成果が見らるべきことを期待したのであったが、低音の処理コードの余韻などについて既往の演奏と同じ欠点を指摘出来ることは残念である。或いは奥田氏自身がそしを脱却出来ずに居る問題なのかも知れないが、この辺が筆者が感じた停滞している面である。来るべき機会にはこの点を払拭して貰いたいものである。

アンコールはソルのギャロップ

(11.25新丸内ホール)

同じシーズンに四つのリサイタルを持ったことは空前の盛況と云っていい。自己の演奏スタイルを確立して了っている人、やっとその緒についた人等さまざまであったが本邦の斯界が大きく動き出さうとする、否動き出していることが立証されたシーズンであったと思う。演奏されたという記録丈では何もならない。謙虚な反省、厳正な批判が同じ努力を更に効果あらしめることは勿論である。短期間にリサイタルが多く開かれれば開かれる程それが可能になるのである。次のシーズン迄今秋の四つのリサイタルが衛星となって斯界の外側をぐるぐる廻ることとなるう。

海外ニュース

ポルトガル：——

3月10日 Jose Duarte Costa の独奏会。
これにはその門下生も参加し、盛会だった。曲目は第1部コスタの独奏

1. コスタ作 シントラ
 2. バッハ作 前奏曲
 3. シューベルト作 アベ・マリア
 4. コスタ作 王女の踊
 5. ビラ・ロボス作 チョロ
- 第2部 合奏と二重奏
6. コスタ作 シブシー
 7. " エチュード
 8. " 舞曲
 9. タレガ作 アルハンブラの思い出
 10. コスタ作 華麗なるエチュード

第3部 十人による合奏

11. コスタ作 古典的練習曲
12. コスタ作 ギターの調べ
13. " ソレア
14. 作音不詳 ロマンソ (禁じられた遊び)
15. コスタ作 東洋の物語り

コスタの演奏会では毎度自作が盛に演奏されていることが注目される。

尚青少年向け映画「海の中の小島」の音楽を担当し、自ら演奏して好評を博している。

ブラジル：——

Ronael Simoes からの便りによると今年サンパウロで行われたギター演奏会は5月5日 Narciso 曲目は

- 第1部 ラモー作 メヌエット
スカラッティ作 ソナタ
ガリレイ作 ニ調組曲
マテオ・アルベニス作 ソナタ
ソル作 主題と変奏
作者不詳 ロマンソ
タレガ作 音楽の小箱
- 第2部 バッハ作 ジャコンヌ

- 第3部 ビラ・ロボス作 前奏曲
トリナ作 ファンダンギロ
ファリア作 ドビッシー讃歌
マラツ作 スペイン小夜曲
グラナドス作 舞曲4番
アルベニス作 セビリア

5月20日 Maria Livia San Marcos 曲目は

- 第1部 ミラン作 パパーヌ
フレスコバルディ作 アリアと変奏
ハイドン作 メヌエット
ソル作 op 22 のメヌエットとロンド

- 第2部 タレガ作 パパーヌとガボット
エンリケ作 マチンタペレラとコブラ・グランデ
サビオ作 アゴコ

- 第3部 ウール作 バガテレ、アリア、狂想曲
トロバ作 前奏曲
自作 海に
テデスコ作 タランテラ

7月16日 A. Segovia 曲目は

- 第1部 ナルバエス作 皇帝に捧ぐる歌
ドウランド作 3の小品
A. スカラッティ作 プレアンプロとガボット
D. スカラッティ作 ソナタ
ソル作 序奏とアレグロ (ニ調)

- 第2部 バッハ作 ジャコンヌ
第3部 タンスマン作 カバティナ
テデスコ作 トナディラ
アルベニス作 セビリア

ドイツ：——

9月にニュールンベルグで第十九回国際ギタリスト会議が開かれた。招待演奏者は Siegfried Behrend, Marga Bäuml, Enrico Tagliavini, Giorgio Balboni. Heinz Bischoff. Lidne Höffer von Winterfeld で、

就中ペーレンドのギター講習会は好評だった。

ペーレンドはこのほど Flamenco-fantasia を高橋功に献曲した。(Bote-Bock 出版)

アメリカ：——

G. Pettine 主宰の FIN 誌は10~11月号表紙に高橋功の写真を掲載した。

10月15日カーネギーホールに於ける V. de los Angeles の独唱会の最後に、例によってギターを弾きながらジブシーの歌を歌って好評だった。

ニューヨークのカラムーア音楽祭に Rey de la Torre が出演しトロバ、ソル、ミラン、サンス、リヨベット、アルベニスなどの作品の外 Phoenix 四重奏団と組んでボックリーニのギター五重奏曲を演奏して絶讃を浴びた。

Westminster はこのほど Julian Bream の Lp の好評に应えて三枚目のバッハ集 (XWN-18428) を出し、これまた好評を博している。シャコンヌ、ハ短調小前奏曲サラバンダ、前奏曲とフーガなどを録音しているのである。

イギリス：——

8月10日ロンドンの BBC から Lolitx Tagore の独奏が放送された。

8月24日ロイヤルアルバートホールの演奏会にソプラノの Carmen Prietto と共演した Julian Bream の演奏が、一部録音でから BBC 放送された。

9月16日 J. D. Roberts のリサイタルがエラール楽堂で行われた。

9月26日 ウィグモアホールに於ける Julian Bream のリサイタルで新進作曲家 Roberto Gerhard の狂想曲と Lennoa Berkeley のソナティナが初演されて好評を博した。(以下28頁へ)

国内 ニュース

10・11 奥田ギター音楽研究所第9回発表会丸の内ホール

10・13 山内ギター音楽同好会第4回演奏会大阪市立桜の宮公会堂

10・19 タカノ・マンドリンクラブ第6回定期演奏会・杉並法人会館講堂・指揮高野吉司

10・28 溝渕浩五郎独奏会・銀座がホール・(曲目は安達右一の演奏会評 p.23 参照)

11・4 ギターの友新人演奏会・丸の内ホール

11・8 小原二郎ギター音楽研究所発表会・丸の内ホール

11・11~12 第4回岐阜県芸術祭・岐阜市公会堂

首藤徳三のマンドリン独奏

ドウニス作 東洋の夢

小川義明指揮の岐阜マンドリンクラブ
マチヨッキ作 ミルタリア外一曲

伊東尚生指揮の岐阜マ・オーケストラ
ラコム作 アンダルーサ外一曲

11・13 高嶺巖ギター独奏会・第一生命ホール

第一部 トロバ作 前奏曲、朝の曲、舞曲
タレガ作 第5前奏曲

トリナ作 ファンタニギロと疾風

第二部 バッハ作 前奏曲、サラバンデ、
シャコンヌ

第三部 ロドリゴ作 アランフェス協奏曲

(ピアノ 川村深雪)

11・16 仙台マクラブ演奏会・仙台市商工会議所ホール 指揮米山晴夫及び高橋功

11・17 古典ギター音楽研究会第11回演奏会・熊本草葉町教会・出演 西野博、
藤井利生、麻生利男外

11・18 小西聖子ギター独奏会・山葉ホール

第一部 ミラン作 二つのパバーヌ
サンス作 二つのパバーヌ
ドーランド作 アルマンド

ガリレイ作 ガリアルダ
第二部 プジョール作 ロマンズ
" 三つのスペイン
小曲

タレガ作 アルハンブラの思い出

第三部 鈴木巖作 古典舞曲
ロシア民謡による変奏曲
ロボス作 インドの歌、チョロ

11・18 三染マンドール十周年記念演奏
会・大牟田市民公館 指揮 田中万三
特別出演 比留間絹子とそのアンサンブ
ル

11・22 第8回ギターを楽しむ会・岐阜日
の丸会館三階ホール

11・24 田村敏雄ギター音楽研究所第16回
発表・会名古屋商工会議所ホール

11・24 中川信隆、右藤寿和ジョイントリ
サイタル・大阪YWCA講堂

第一部 右藤寿和
サンス作 パパーヌとフォリア
ラモー作 ガボット
グルック作 バレー
バッハ作 2のガボット

第二部 中川信隆
ラモー作 メヌエット
ビゼー作 6の小品
ソル作 ミヌエットとソナタ(15番)

第三部 右藤寿和
タレガ作 ラグリマ、パパーヌ、アル
ハンブラの思い出

ロドリゴ作 小麦畑にて
トロバ作 アレグレット

第四部 中川信隆
ロボス作 前奏曲
トリナ作 アンダンテとファンダンギ
ロ

タンスマン作 カバチナ

11・25 奥田紘正ギター独奏会・丸の内ホ
ール

第一部 ビゼー作 6の小品
スカラッティ作 ソナタ
ソル作 主題と変奏(作品3番)

第二部 テデスコ作 ソナタ

第三部 バガニーニ作 ギターとパイオ

リンのためのソナタ・コンチェ
ルティタ

第四部 グラドス作 スペイン舞曲5番
アルベニス作 グラナダ
トロバ作 ファンダンギロ

" 前奏曲

11・27 縄田マ・ギ・研究所ギターの祭典・
大阪松坂会館

11・30 北大チルコロ・マンドリニステイ
コ・オウロラ第34回定期演奏会。
指揮富沢光史

12・1 慶応マ・クラブ第79回定期演奏会・
読売ホール 指揮 服部正

12・1 広島マ・楽団第六回演奏会中国新
聞社ホール 指揮 小島克巳

12・3 横尾ギタースタジオ発表演奏会・
丸の内ホール

12・7 和歌山大マ・クラブ第一回定期演
奏会、市民会館 指揮 成川典利と片山
顕太郎

12・8 比留間絹門下生演奏会・山葉ホー
ル

12・12 アンダルシア(酒井富士夫主宰)
発表演奏会・日本相互ホール

12・14 日本ギター教授者協会合同演奏会
大阪松坂屋7階ホール

12・18 札幌スペインギター研究会の第1
回研究発表会。札幌商工会議所ホール。

(27頁よりつづく)

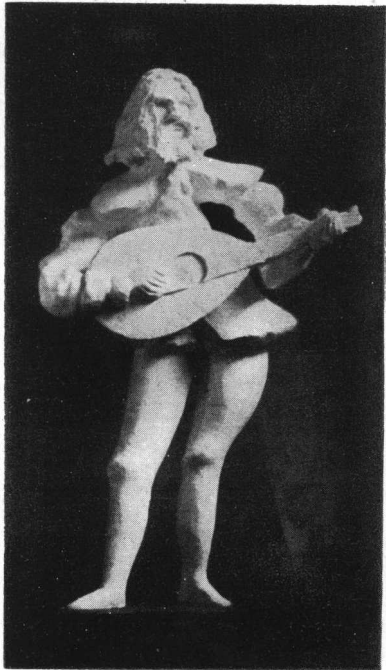
10月9日にはウォターデールの高等女学
院ホールで Julian Bream の演奏会。

10月28日にはロイヤル・フェスティバル・
ホールで Arsdres Segovia の独奏会
作曲家達が競ってブリームのためにギタ
ー曲を製作しているのが目立ってきた。

おしらせ:-

三好楽器商会 移転

大阪市生野区杭全町819
(市電バスくだら停東川筋北入)



← 岐阜のすぐれたマンドリニスト首藤徳三氏は
又すぐれた彫刻家で、ギターを抱く像（石膏身
長30㎝）を沢山製作している。ここに載せたの
は中野二郎氏のデザインになる本誌の表紙をモ
デルにした傑作である。希望者は岐阜市笹土居
野33の本人に直接照会されたい。

グラヅノフのマヅルカをクラムスコイがギタ
ー独奏曲に編曲した佳作。この種の、この程度
の愛すべき作曲品が手元に数々あるので、希望
が多ければマイクロフィルムなり、写譜なりで
おわけすることも考えている。

高橋宛に申込まれたい。



Мазурка

マヅルカ

グレチャニノフ

А. ГРЕЧАНИНОВ

Tempo di Mazurka

Handwritten musical score for Mazurka by A. Grechaninov. The score is written on four staves. The first staff begins with a treble clef, a key signature of one sharp (F#), and a 3/4 time signature. The tempo marking "Tempo di Mazurka" is written above the first staff. The first staff also includes the dynamic marking "mf" (mezzo-forte) and the instruction "Vp" (Vivace). The second staff includes the dynamic marking "p" (piano). The third staff includes the dynamic marking "p" (piano). The fourth staff includes the dynamic marking "p" (piano) and the instruction "rall." (rallentando). The score concludes with a double bar line.

編集後記

本年度最終号をおとどけします。ロシア——ソ連特集というわけですが、これは何も人工衛星打上げに眩惑されて思立ったアイデアではありません。宇宙学に於いてソ連の科学は世界に冠たるものでしょう。しかしソ連のギター界は、今のところまだ真の姿が伝えられていませんので、はっきりつかみ得ないのですが、人工衛星打上げほどには進んでいないようです。しかしオイストラフ父子、ギレリスなどのような逸材を出しているのですから、近い将来セゴビアやジュリアン・ブリームをしのぐ惑星のギタリストが出ないとは断言出来ません。

この特集を編むにあたって武井花子夫人や OST の理事兼藤栄、甲藤三千雄氏らの御配慮によって武井文庫秘蔵の文献を見せていただけたことを特記し、感謝しないではいられません。たゞソ連の青年平和友好祭に出席した鈴木巖氏にお願いした原稿が都会によっていたゞけなかったことは残念でしたが、それに代るべき Ivor mirant の記事を BMG 誌から取材出来たことは幸でした。

12月という月は武井守成氏と Tarrega の亡くなった月です。この号にはタレガの記事は出しませんでした。武井氏の令嬢足立直子夫人と OST の有力メンバーだった甲藤氏から玉稿をいたゞけたことは、本誌を飾るにふさわしいものでした。レコード界のベテラン藤田不二氏の連載は一応これで終わりますが、又稿を新にした玉稿をいたゞいて待機しています。小西誠一氏には御多忙中を願って一文を草じていたゞきました。安達右一の演奏会評は、その緻密な、そして善意にみちた方法と文章で人気が出てきました。

本誌の編集について各方面から色々意見を承って有難く思っています。少し高級すぎるという意見があるかと思うと、今すぐには役に立たなくともいつかは必ず役に立つ誌だとか、現在のレベルと質をおとさないでほしいという註文もあります。高橋臭が出すぎるという意見と同時に高橋趣味をもっと打ち出して一般教養の誌にまで持っていってはどうかなどとおだてゝ下さる方もいるのです。しかし、初心者向の記事が少ないことは事実で、これは何とかしたい、しなくてはならないと心がけています。

来年のことを言うのが鬼が笑うといゝます。しかし早いもので来年は復刊第5年になりますし、沢口氏がアルモニアを創始してから30年にあたりますので、顧問と相談して色々なプランをねっています。何れ次号で発表することになります。新しい構想で五周年を迎えるので張切っていますからどうぞ御期待下さい。

いよいよ寒さに向います折から、流感にめげず無事御越年を祈ります。(高橋)

誌費 1冊 100円 半年分3冊 300円(〒共) 一年分6冊550円(〒共)

昭和 32 年 12 月 22 日 発行



発行者	高橋 功
発行所	宮城県亙理郡山元町坂元 (振替仙台 8681)
印刷所	今野印刷所 仙台市土樋258